

新緑の上高地と残雪の涸沢詣で



「芽吹いたばかりの化粧柳越しに岳沢を望む」

期 日 2017年5月20日～23日 参加 石川 誠 (74歳) 他1名

行 程 5/20日(土)晴

横須賀 6:20 発・圏央道・中央高速・松本・中の湯温泉 13:00 着

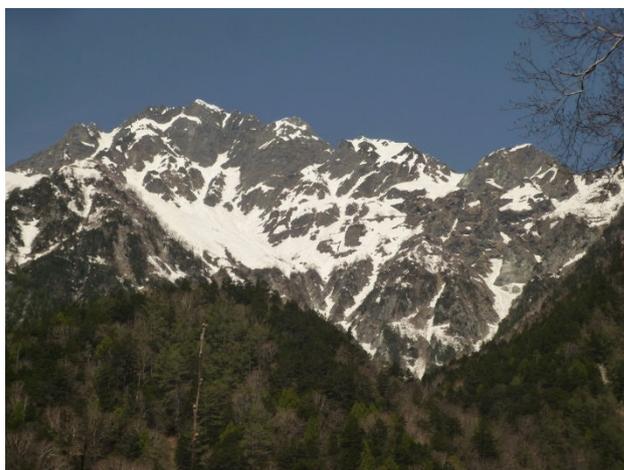
自宅から圏央道に乗り中央高速で松本、中の湯温泉旅館に入る

5/21日(日)晴

中の湯 6:00 発・6:20 上高地バスターミナル 6:30 発
-7:10 明神 7:30-8:20 徳沢 8:40-9:40 横尾 10:05
-11:35 本谷橋 11:40-14:00 涸沢ヒュツテ (泊)

中の湯からタクシーで上高地入り、静かな梓川河畔を明神、徳沢、横尾への道を辿る。観光客も少なくのんびりと進む。昔、鈴木正美君と登った雪の明神東稜から前穂の頂上でのビヴァークが懐かしく思い起こされる。徳沢への道のり二輪草の群落が素晴らしい。

徳沢からの奥又白谷、前穂東壁群、北尾根も輝いている。踏み替え点も残雪に覆われ、奥又の池は、



「奥又白谷から北尾根を望む」



「横尾から前穂高岳」

手に大きな屏風岩が聳えている。登攀者の姿を追うが見て取れない。本谷橋で雪渓に降り横尾谷の右股を分けて左に涸沢への道を辿る。橋は片付けられていて、途中所々に紅柄が撒かれ登山道を案内してくれる。

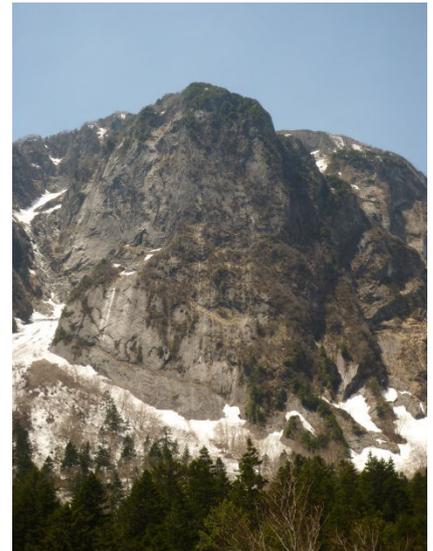
左に屏風の頭からの最低コルが遥か上に見て取れる。徐々に登るにつれて北尾根が現れる。一段高い段差を登ると北尾根、前穂からの釣り尾根が見え奥穂へと繋がっている。しばらくして吹き流しの有る涸沢ヒュッテが見えてきて、涸沢槍、松濤岩、北穂と 360 度の眺望がすばらしい。

ゴールデンウィークや紅葉の季節には登山者で賑わっている涸沢も、今は奥穂も北穂も今は静まり返っている。ヒュッテに泊まるのは以前市民登山の引率で奥穂に来た時以来であろうか。

まだ雪の中であろう。インゼルの上前穂直下にDフェース、右岩稜が見て取れる。この季節に入るのは何年振りだろうか。

景色を見ていると当時のことどもが蘇ってくる。横尾へ向かう途中で森羅の川名君と轟さんがお客さん 2 人を連れて降りてきた。奥穂高に登って来たという。涸沢は静かでしたよと声を掛けてくれた。

横尾の避難小屋も健在、岩小屋を見学しながら左



「1 ルンゼから屏風岩」

5/22 日 (月) 晴 午後俄雨、雷雨

涸沢ヒュッテ 7:00 発-9:00 横尾 9:20-10:05 新村橋 (奥又出合参拝) 10:45-11:45 嘉門治小屋 12:15-13:30 河童橋-13:50 ウェストン碑-帝国ホテル前 墓碑参拝-14:50 帝国ホテル休憩-15:50 バス-16:20 中の湯温泉着 (泊)



「涸沢に入って吊尾根を見上げる」

朝食を済ませ、奥穂を見上げるザイテンを登る登山者があるの見える。北穂沢にはトレースがない。

下りはグリセードが快適なのだろうか。雪が腐って中々滑らないのかも知れないが。



「ザイテングラードから白出のコル」

三島君と北尾根 4,5 ノコルを越えて奥又白谷に入り右岩稜古川ルートから前穂高頂上へ、下りは 3.4 のコルからグリセードで涸沢に降りたことが思い起こされる。



「ヒュッテから奥穂を見上げる」

食べ、穂高神社奥社を参拝し上高地へ河童橋は喧騒の中にあった。久方ぶりにウエストーン碑を見て帝国ホテルに出る。

昔搜索でお世話になった木村小屋はまだ健在なのか・この頃になると穂高吊尾根あたりに暗雲が垂れこみ雷鳴が轟き始める。ホテル前の霞沢岳・八右衛門沢にある共同墓地に向かう。此处で昭和 42 年 3 月に逝った中村・安部両氏の墓碑をお参りする頃には、



「朝焼けのザイテングラート」

こととした。

5/23 日 (火) 晴

中の湯 8:30・中央高速経由・途中稲城娘宅により帰宅 16:30 着
早々に中の湯を後にして新緑に染まる坂巻温泉、沢渡、島々を
経由して塩尻出て、中央高速で途中稲城にある娘の処によって帰宅した。

久しぶりの涸沢に別れを告げ適度にしまった雪渓をのんびりと横尾へと下る。限りなく静かな空気に至福の時を感じる。横尾から徳沢への道を辿り、徳沢手前で新村橋を右岸に渡り、奥又白出合まで戻る。パノラマコースはまだ雪の中通行止めとなっていた。出合で D フェースに逝った中村、安部両先輩の冥福を祈り、梓川沿いに明神へ向かう。嘉門治小屋で岩魚を



「北穂沢から北穂を望む」

雨も大粒になり稲光と共に雷の音凄まじく、早々とお参りを済ませ墓地の前の帝国ホテルに逃げ込む。

観光客らしき人達も雨宿りかかなり混んでいた。墓参と雪の涸沢詣という初期の目的も果たせたので、ここでバスの時間までのんびりとコーヒーを啜る。車を置いてある中の湯に戻ったが、これから帰るのもどうせ夜遅くなり、9 月には後期高齢者の身

疲れて事故を起こすのも辛いのでもう一泊して

のんびり熱いお湯に浸かること



「中村・安部両氏の墓碑」



ウォルター・ウェストン碑



上條嘉門次翁 碑 明神

上高地の木村さんに初めてお会いしたのは、昭和 42 年 3 月に発生した当会会員、中村、安部両氏の
前穂高東壁Dエースにおける遭難に伴い第一次捜索隊として上高地にある木村小屋に入った時である。

うす暗い小屋の中、ストーブの前に鎮座している木村さんはまさにギリシャ神話に出てくる酒の神
バッカスの様相に似て近寄り難く、その畏敬の念に駆られる思いが強く印象に残っている。

当時長野県遭難対策協議会北アルプス南部救助部長であった木村さんには地元警察、捜索方法、連
絡など第 6 次に亘る捜索から収容を終えて茶毘にふすまで、何かとご指導、助言を戴いたことが強
く印象に残っていて、上高地で墓参をするたびに、お茶うけに出していただいた美味しい赤カブと
共に思い出す忘れえぬ方でもある。感謝。

記録 石川 誠

上高地の大将 「木村 殖」さん 抜粋



上高地の大将
木村殖 さん

堀金田多井に生まれました。1927 年（昭和 2）に外交官になろうと決心し、
普通文官の受験勉強のため、父が管理人をしていた上高地の温泉ホテルに入
りました。内野常次郎に狩猟の指導を受けながら、勉強に取り組みましたが、次
第に山の魅力に取り付かれ、入山 2 年目には、父に代って、冬小屋に閉じこ
まるようになりました。1931 年（昭和 6）に庄吉小屋に住み、1933 年（昭和 8）
には帝国ホテルへ移り、裏に木村小屋を建て、大学の山岳部の世話をしながら、
戦前・戦後にかけて多くの遭難救助に貢献しました。県遭難対策協議会北アル
プス南部救助部長を務め、戦前・戦後にかけて通算 1,400 から 1,500 件の遭難
を扱いました。1969 年（昭和 44）、自伝『上高地の大将』を実業之日本社か

ら発刊しました。